

第6話
ベランダの蝙蝠



時計の針が一時を指した。放ほうっておくと、すぐに五分は遅れてしまう。いい加減くたびれてきた腕時計だったが、モリイズミは買い換えることができなかつた。

さしたる理由があるわけではない。もし、理由があるなら、その理由を覆す理屈を編み出せば、それで、こだわりから解放される。けれども、わけもなく、手放せないものはどうしようもなかつた。

モリイズミは指定のアパートと地図を見くらべ、間違いがないことを確認すると、きっかり午前一時に依頼人の部屋のチャイムを鳴らした。

なにしろ、こんな時間なので間違いがあつてはならない。おかしなもので、「夜中でも回収します」と宣伝したら、夜中の方が都合がいい、というオーダーが過半数を占めた。

とはいえ、女性からのオーダーで深夜の回収は

きわめてめずらしい。

モリイズミが逆に警戒しながらドアの前に立っている、ドアの向こうに気配がし、ややあつて、カチリとロックを解除する音が聞こえた。予約の際に「わたしが回収にうかがいますから」と電話で告げ、「それなら、よかつたです」と深田^{ふかだ}さん——というのが依頼人の名前なのだが——が明るい声で応^{こた}えたのがまだ耳にのこっていた。

その同じ声で、「あ、本当に来てくれたんですね」とドアを十センチほどあけ、モリイズミの顔を検分するように暗がりから見っていた。十センチがそろそろと三十センチになり、それからようやく開け放たれて、「どうぞ」とモリイズミは招き入れられた。

玄関に整然と並ぶ地味な色あいのハイヒールや革靴を一瞥^{いちべつ}し、モリイズミは部屋にあがる前から今夜の依頼人が生真^{まじめ}面目で、きれい好きで、おそらくはやや内向的な性格に違いないと、これまでの経験をもとに推察していた。

電話機を処分してほしいと依頼してくる人たち

は、大まかに云^いってふたつに分けられる。

ひとつは電話機および電話という通信システム自体を疎んじている人たち。彼らほともすれば、電話機に対して憎しみに近い感情を抱き、「なんでもいいから、とつとと持っていてくれ」と、厄介払いをするような態度を見せる。

もうひとつはその反対で、電話に強い思い入れがある人たちだ。理由はそれぞれだが、たとえば、大事な人とのつながりが電話での会話に限られていたとか、あるいは、パソコンや携帯電話を使い始めたのがつい最近で、どんなことでも電話で済ませてきたそういう人たちは、電話機そのものへのフェティシズムに近い偏愛ぶりを見せる。

モリイズミの第一印象では、この深田絵美^{えみ}という女性は電話に関する何らかの記憶にほぼ縛られていると見えた。それゆえ、自らの手で処分することができず、モリイズミのような回収業者に依頼したものと思われる。一見、まだ歳若い女性^{としわか}と思われたが、蛍光灯の下に立って、「それです」と部屋の隅を指差した顔は、それなりの人生

経験を積んできた少し疲れた顔に見えた。

「この電話です」

彼女は電話機を両手で包み込むようにし、その手つきひとつとっても、モリイズミには察しがついていた。

こういう場合、モリイズミもその手つきに同調する必要がある。乱暴に電話線を壁から引き抜いたりすると悲鳴をあげる依頼者もいて、「やっぱり、やめます」と回収を拒絶する人もいた。

そうした事情を踏まえ、モリイズミは白い手袋を装着すると、宝石を取り扱うように丁寧に電話機を取りはずして持参した布袋におさめた。

「では、いただいて参ります」

言葉づかいにも留意し、ほとんど実家の葬儀屋のマナーを転用して厳粛に作業を執りおこなった。深田絵美はそうしたモリイズミの仕事ぶりに感じ入るところでもあったのか、「あの、もしよかったら」とモリイズミを引きとめた。

「お茶でもいかがですか?」

普通だったら、「いえ、わたしはこれで」とす

みやかに立ち去るところだった。が、モリイズミは彼女の「もう少しだけ」と懇願する声に惹かれ、「では、お言葉に甘えまして——」

と応じることにした。

というより、「もう少しだけ」という言葉の意味するところが気になったのだ。もう少しだけ——なんだろう？

（もう少しだけ、その電話と最後の時間を過ごしたい）と云いたいのか、それとも、（もう少しだけ、ここにいてください）とモリイズミに云っているのか——。

こぢんまりとした部屋だった。ダイニングのついたワンルームで、部屋の真ん中に布団を取り払った炬燵こたつが置いてあった。テーブルらしきものはそれしかない。あとは、クローゼットと本棚と押し入れだけである。

モリイズミは手袋をはずしながら炬燵の前に座り、

「この先、電話はもう使わないんですか」

と定番の質問を試してみた。

「ええ。電話は携帯で間に合っていますから」

そういう人がほとんどだった。モリイズミの仕事が忙しいのは固定電話の必要がなくなった人たちを絶たないからで、それでもなお維持しつづける人たちは電話番号に未練がある人が多かった。

たとえば、彼女が携帯電話を使い始める前に誰かと交流があったとする。その誰かは、当然ながら彼女の電話番号といえは固定のものしか知らない。いまはもう交流はないが、もしかしたら、その人から電話がかかってくるかもしれない。

それで、捨てることのできない人が少なからずいた。捨ててしまえば、それきりその人とながつていた細かい糸を自分から断つことになる――。

確信まではいかなかったが、おそらく彼女もそのクチではないかとモリイズミは踏んでいた。

ただ、そうした立ち入ったことは訊かないようにしている。訊かなくても、およその察しはつきし、事情を聞いたところで、不器用な性格のモリイズミは、気の利いた言葉をかけることができない

かった。

だから、これまでも基本的には事情を訊かずにきたのだが、モリイズミが訊かなくても、依頼人の方が勝手に話し始めることがある。特にこうして「お茶でも」となったときはそうなる確率が高かった。

（仕方ない）とモリイズミは腹を決め、どんな話が出ても動揺することなく、「それは大変でしたね」と当たり障りのない言葉を返そうと決めていた。

ところが、深田絵美はお茶をいれてモリイズミに差し出すと、

「じつは、ベランダに蝙蝠こうもりが——」

と唐突にそう云った。

「はい？」とモリイズミは思わず訊き返す。「蝙蝠、とおっしゃいました？」

「ええ」

うなずきながら彼女はカーテンのさがった部屋の奥に目を向け、「そこに」と云うのだから、そのカーテンの向こうがベランダなのだろう。

モリイズミは何と応えていいものか判らず、しばらく黙ったままカーテンを見据えていたが、そのうち沈黙が重苦しくなってきた。

「それは大変でしたね」

準備していた言葉を口にする、

「いえ、蝙蝠はいまもそこにいるんです」

深田絵美は背筋を伸ばしたまま、まっすぐにカーテンを見ていた。あたかも彼女の目はカーテンの向こうのベランダを透視しているかのようで、それが伝染して、モリイズミにもその姿かたちが見えるようだった。

蝙蝠はベランダの軒下に身をひそめ、お決まりのポーズでさかさまにぶらさがって眠っている。でなければ、眠っているふりをして眠っているだけで、部屋の中にいる女の動向をうかがっている。これが大昔のヨーロッパのバルコニーであれば、蝙蝠は吸血鬼のしもべ、もしくは化身と見なされていたから、その餌食えじきにふさわしい若い女性は震え上がるべきなのだ。

しかし、深田絵美はどちらかという、「蝙

蝙蝠」と口にしたときに、気のせいか目尻めじりがさがつたように見えた。むしろ、蝙蝠の到来を待ち望んでいたかのようで、そう思うと、蝙蝠が黒服に身を包んだ美青年にみるみる変貌へんぼうしてゆく――。

カーテンの向こうのベランダに青年は佇たたずんでいて、部屋の中の女と、よりを戻したいのだが云い出せない――。

女にもその気がないわけではなかった。それが証拠に長いあいだ電話線を断つことができず、男がふたたび自分のもとに戻ってくることを、内心、心待ちにしていたのだ。

そして、男はついにやってきた。

街の電信柱から電信柱へと渡り歩き、唯一の手がかりであった電話線をたどって、この部屋のベランダに到着した。

しかし、時すでにおそし。女は待ちあぐねたあげく、男とつながった糸を断ち切ることを決め、たまたまポストに投げ込まれていた「電話機、回収します」のチラシに従った。

それで、男は宙ぶらりんになった。

蝙蝠になつてしまった。

どうにか、あと一步の境界線まで——すなわちベランダまでたどり着いたのに、その先にはすでに結界が張られている。そして、電話線はたったいま断たれ、彼女とつながることはもう叶かなわない。

そこで、モリイズミは頭を振った。

行き過ぎた妄想を振り払い、

「本当に、いいんですね」

ただそれだけを深田絵美に確かめた。

「はい」と彼女は首を縦に振り、「もう、いいのです」と首を横に振った。

また、しばらくの沈黙が部屋を浸し、「じゃあ、そろそろ」とモリイズミが云いかけたところへ、「わたし」と深田絵美が話をつづけた。

「わたし、デパートに勤めているんですが——」
「はい」とモリイズミは浮きかけた腰をもとに戻した。「売り子さんでしょうか——」

「いえ、エレベーター・ガールなんです」

「ああ」とモリイズミはそれしか返す言葉がない。

(だから何?)と云えるものなら云ってみたかったが――。

「もう、やめようかと思ひまして」

「そうですか」

「エレベーター・ガールにはやめる潮時があるんです」

「ああ」とまた云つてしまふ。(たしかに年齢的な制限がありそうだ。ガールつて云つてるし

――)

「年齢とかじゃないんです」

「あ、そうなんですな」モリイズミは思わずちろりと舌を出した。

「帽子が似合わなくなつてきて――」

「はい?」

「エレベーター・ガールつて帽子が命なんですよ。たとえ、化粧の乗りが悪くなつてきたり、笑顔に華がなくなつたりしても、あの制帽をかぶると格好がつくんです。逆に云うと、あの帽子がなかったら、誰もわたしのことをエレベーター・ガールとは思わないでしょう」

「そんなものですか」

「あの人も——」

そう云って、彼女がベランダの方をちらりと見たのは偶然だったろうか。

「あの人もわたしの帽子を褒めてくださって」

「あの人——というのは男の人でしょうか」

「ええ。ときどき、電話をくださって」

(やはり)とモリイズミは自分の妄想があながちでたらめでもないことに気を良くし、思わず顔が笑ってしまいそうになった。これは葬儀屋の仕事でもよくあることだが、そういうときは、たいいてい笑っていい場面ではない。

「ご高齢だったので——」

(あ、そうなんだ)

「もう亡くなられてしまったんです」

(ああ、そういうこと——)

「ただ、亡くなられてからも、ときどき電話はあって」

(え?)

モリイズミは背筋に寒気を覚え、(あ、こうい

うとき人間って本当にぞっとするんだな」と感心する余裕もあるにはあった。

「それは大変でしたね」——とナントカのひとつ覚えで、かけるべき言葉が思いつかない。とにかくここは余計なことを云わずに、さっさと退散するのが得策であるとモリイズミは冷静に判断した。「では」と電話機をおさめた布袋を抱えて立ち上がり、「次がありますので」とカーテンも彼女の顔も見ずにそそくさと玄関へ急いだ。靴を突っかけるように履き、ドアノブに手をかけたところで、いきなり背後に気配が迫った。

「お代金です」

振り向くと彼女の顔がすぐそこにあり、妙に青白い封筒を差し出して、所在なげに立っている。

「ありがとうございます」

本当は封筒を引たくって即座に走り出したかったが、なけなしの笑顔をどうにかふりまいて玄関を後にした。

（振り返っては駄目）（まっすぐ車まで歩いて）

（幸い——幸い？——車の中には葬儀屋を手伝う

ときに着替える喪服がある）（喪服のポケットには清めの塩もあるから）（あれを振って、何もかも忘れよう）

抱え込んだ袋の中の電話機が、急に冷たく重くなったように感じられた。

*

車を発進させる前に松井まついはミツキに「本当にそれでよかったですか」と念のため訊いてみた。

「さあ、どうでしょう」とミツキは案の定、歯切れが悪い。「正直、監督がどんなものをイメージしているのかももうひとつ判らなくて、もしかして監督も判っていないのかもって思うし、もっと云うと、落花生の殻割り器なんて、本当にこの世に存在してるのかしらって思う」

「ええ。いずれにしても、私にはそれ、どうしてもラジオペンチにしか見えないんですが——」

「はい」とミツキは松井の意見を素直に認めた。

「じつは、わたしもそう思っています。というか、

間違いなくこれはラジオペンチですよ。でも、あのお兄さんが——」

「ええ。あの青年はじつに誠実でした。『これは、あくまで自分がピーナツツ・クラッシャーと名づけたのであって』と、何度もそう云ってました」

「あ、いまの、そっくり。あの喋り方しゃべにやられちゃったんですよ、わたし」

「『だから、世間ではそう呼ばないかもしれません』」

「はい」とミツキは青年に応えたときと同じようにきっぱりと云った。「世間でそう呼ばなくても誰かがそれをピーナツツ・クラッシャーと云い出したら、それはもうピーナツツ・クラッシャーなんです」ミツキは息をついた。

「そういうことにおきましよう」

「そうですね」と松井も同意する。「誰も見たことがないのなら、本物か偽物か見分けがつきません」——そう云って、「ああ、そうか」といませらのようにつぶやいた。

本当に誰も見たことがないのなら、たしかに誰

にも判断はつけられない。が、もしかして、知らなかったのは自分だけで、世間の人たちはよくよく知っているということもあり得る。というか、きつと知っているのだ。たとえば、ミツキは現場の人間なのだから、ピーナツ・クラッシュヤーがどんなものなのか知らなくても、世間で「名探偵シュロ」と呼ばれている男がどんな外貌がいぼうの人物なのか知っているはずだ――。

「あの」と松井はあらかじめ恐縮して尋ねた。「急に話を戻しますけど、その名探偵シュロっていう人は、どんな顔をなさっているんでしょう?」「顔?」とミツキは急な質問に、一瞬、目をしばたたいたが、「それって、どっちのシュロですか」とスマートフォンをた持ち上げながら松井の背中に向かって訊いた。

「ああ」と今度は松井が視線を泳がせる。「ええと。じゃあ、映画の方のシュロさんはどんな顔でしよう?」

ミツキは松井が逡巡しゆんじゆんしたわずかなあいだにインターネットの検索でシュロを演じている役者の顔

写真を見つけ出した。指先で拡大して松井に見せ、「この人です。新人なんです。オーデイションで、なるべく本物のシュロに似た人をもってことで選ばれたみたいです。名前は——ちよつと待ってください——あ、そうでした。芹川せりかわ哲夫てつおさん。まだ、この映画にしか出てないんじゃないかな」

松井は写真を見るなり、「違いますね」と首を振り、「この人は私が乗せた人ではないです」と口をとがらせた。するとミツキは、ふたたび検索をし、今度はシュロ本人の写真を探し出して「じゃあ、この人？」と松井に見せた。

「ああ、そうです」松井は画面に見入り、「間違いないです」と、バックミラーに映ったあの顔と照合していた。

*

「ふうん」と冬木ふゆき可奈子かなこはパソコンのディスプレイを見つめ、検索結果に並んだ「名探偵シュロ」の顔写真をひとつひとつ吟味していった。演じた

役者も本人も、

「なかなか、いい男じゃない」

と、俄然^{がぜん}、興味が湧^わいてきた。隣で聞いていた後輩の後藤新一^{ごとうしんいち}が、「可奈子さん、何をぶつぶつ云ってるんです？」と冷ややかな目でディスプレイを覗き込む――。

「イケメンの鑑賞もいいですけど、ぼくはもう帰りますから、バトンタッチ、お願いしますよ」

「はいはい」と可奈子はいつになく上機嫌だった。自分のプライベート・デスクからいつもの二十五番デスクに移動し、小ぶりなミネラル・ウォーターのペットボトルを一本、携帯電話と眼鏡^{めがね}とメモパッドとボールペンをデスクに並べ、ヘッドセット・マイクを装着すると、

「さあ、どうぞ」

誰へ向けてでもなく、東京の夜に向かって声をかけた。

その「どうぞ」に呼応するかのように次々と電話がかかってくる。これがもし客商売であったら大繁盛だ。

可奈子はしかし、電話を受けた人数や時間に関係なく決まった給金をいただいていた。だから、ひと晩で何人の話を聞いたかはひとつも自慢にならない。ただ、その夜の可奈子は自己最高記録を更新し、これはつまり、一人あたりのオペレーションが短かったからで、短くなるのはひとえに電話の向こうの彼や彼女の抱えている問題がシンプルだったからだ。

たとえば、この深夜にどこで水彩絵の具が買えるか、というような、求めているものが判りやすく、ただちに解決できる問題ばかりだった。

これが複雑な案件になると、そもそも何が問題なのか、彼や彼女が何に迷ったり苦しんだり悲しんだりしているのが、さっぱり判らないことがある。

しかし、この日は進路相談や失恋の癒し方といった定番の相談がつづき、もともと機嫌のよかった可奈子はなおさら調子よく二時間ほどノンストップで話しつづけた。

(少し疲れたかな)と感じ、ここらへんで缶コー

ヒーブレイクでも入れようかというところへ、いきなりすすり泣いている女性の声がヘッドフォンから聞こえてきた。

「はい。こちら、〈東京03相談室〉です」

(泣きやまない)

「どうされました——」

「すみません」とハナをすすり、しきりにティッシュをがさごそとやっている音が聞こえてきた。

「急がなくていいですよ」

可奈子は自分自身にも云い聞かせるように、自分の出せるいちばん穏やかな声で話しかけた。

「お名前は？——本名でなくても構いませんので」

可奈子の問いに、

「エーコです」

湿気を含んだ声が返ってきた。可奈子は手もとのメモパッドに「エーコ」を「A子」と記し、とはいえ、レスポンスの速さから云うと、あるいは「栄子」なのか「英子」なのか、あえて本名を名乗ったとも考えられた。

そういう人も多い。「B子」だの「サリー」だのといった仮名で話していると、自分の問題なのに他人ごとのような気がしてくるらしい。どうせ顔は見られていないし、相談者とオペレーターは一期一会なのだから、本名を明かしたところで何ら問題はない――。

「うまくいってないんです」とA子はようやくやくそう云った。それから少し間を置いて、「なのに、うまくいっているように演じなければならなくて」と小声で付け足した。

具体的なことは判らなかつたが、相談事の導入としてはよくあるパターンだった。親子なのか恋人なのか夫婦なのか、どのような関係においても、「演じることに疲れた」というため息まじりの相談をこれまでに何度も聞いてきた。

「誰とです?」と可奈子はまず、やんわりと訊いてみた。「誰とうまくいっていないんです?」

「みんなとです」

「みんな?」

「みんながみんなとうまくいってないんです」

「みんな——と云うと、何人かいるわけですね」
「はい。女の子ばかりが十一人——」

（女の子ばかり？）次第に落ち着いてきたようだったが、涙まじりの声から始まったので年齢の見当がつかなかった。でも、「女の子ばかり」と云うのだから、彼女もその「女の子」のひとりなのだろう。

可奈子は少し考えて、「どんな女の子たち？」とややフランクに訊いてみた。

「選ばれたんです、わたしたち」

（ん？）と可奈子は顎の先に人差し指をあてる。

これまでも「私、選ばれた人間なんです」とか「自分は選ばれた者なのに、どうしてうまくいかないのか」と訴える相談者が何人もいた。しかし、話を聞いていくと、その「選ばれた」は自己判断に過ぎず、つまりは、何にも選ばれていないのである。

「何に選ばれたんでしょう？」

「オーデイションです。映画の」

その答えを聞いて、可奈子は両手をデスクに置

いて背筋を伸ばした。「ということは、あなた、女優さん?」

「いえ、わたしは初めてのオーディションで。でも、十一人の中には女優経験のある人もいて、そういう——なんていうんでしょうか、温度差っていうのか、それがうまくいってない理由かもしれないです」

(あれ? 思っていたよりちゃんと喋ってるじゃない)

可奈子はメモに走り書きした△印を急いで○印に直した。○は「りゅうちょう流暢」で△は「平均的」、×印は「理解できず」の符丁である。

「ということは」と可奈子は話を整理した。「A子さんを含む十一人の女の子が映画のオーディションに受かり、その十一人の関係がうまくいってない——」

「そうです」

「でも、A子さんは、あたかもうまくいっているかのように演じている——」

「わたしだけじゃなく、みんなそうだと思います」

す」

「オーディションがあったのはいつでしたか？」

「一ヶ月前です」

「じゃあ、いまは何をしているんでしょ？ 撮

影はもう始まっているんですか」

「いえ、いまは撮影に向けたワークショップを繰り返しています」

「それがうまくいかない——」

「いえ、そうじゃなくて、ワークショップのときはみんな活き活きしてるんですけど、寮に帰ってくる——」

「寮？ 寮にいらっしゃるんですね」

「はい。十一人で生活を共にしているというか——」

（そういうこと）と可奈子はA子の云ったことを素早くメモに書きとった。この案件はシンプルとは云えないまでも、何が起きているか判らないというレベルではない。

「寮というのは、どんなところなんです？ いまも？ いまも寮にいるんですか」

「はい」

「いま、もしかして、まわりに誰かいたりします?」

「いえ、部屋は別々なので」

「ひとりにひと部屋?」

「ええ。十一人全員が地方から出てきて——たまたまなんですけど」

(なるほどなるほど、だんだん判ってきました)

メモをとりながら可奈子はうなずいた。

「女の子ばかりで、大人はいないのかな?」

「ええと——寮母さんがいらっしゃいます」

「他には?」

「いません」

「じゃあ、リーダーとかキャプテンなんかは?」

「そういうのもいないんです。みんな平等に、と云われて」

「それは誰が云っているんです?」

「監督とか、プロデューサーとか、マネージャーとか、そういう大人の人たちが現場に行くと何人もいて——」

「現場？」

「スタジオのことです。あと二週間でクランク・インで、いまは毎日、撮影所と寮を往復しているんですが——たぶん、このままだとやめちゃう子も出てくるだろうし、わたしも——つづけられないかもって」

「そう——」と可奈子は腕を組んでメモを最初から見なおした。「さっき云ってた寮母さんというのは？」

「掃除をしてくださったり、ご飯をつくってくれたり」

「あ、食事も一緒なんですね」

「はい。食堂があって、そこでみんなと一緒に食べます」

（それだ）と可奈子はひらめいた。「みんなでひとつのテーブルを囲む感じ？」

「そうです」

「じゃあ、ご飯を食べたあとに、一度、話し合ったらいいんじゃないかしら」

「みんな、食べ終わったらすぐに部屋に戻っちゃ

います」

「そこをなんとかA子さんが引きとめて、みんな
で話し合おうって——」

「無理です。わたしより歳上の人もいるし、みんな
なすごく独立心が強くて、お互いをライバル視し
ていて——」

「でも」と可奈子はもうひと押しした。「なによ
り話し合うのが一番だし、リーダーがいなくな
ると、誰かが率先しない限り、いつまでもバラバ
ラなままです」

「そうなんです」

「勇気を出して、トライしてみたらどうかかな」

それしか云えなかった。きつと十一人いるなら
十一人それぞれの考えや思いがあるだろうし、誰
かが声をあげない限り、いつまでたっても埒らちがあ
かない。

長い沈黙のあと、

「わかりました」

とA子さんは答えた。(よかった)と可奈子は
とりあえずそう思ったが、それはひとまずこの電

話でのやりとりに区切りをつけることができたという自分自身の安堵あんどにすぎなかった。何も解決していないし、少なくとも（よかった）などと胸をなでおろすところまで至っていない。

それが可奈子のジレンマだった。何ら解決していないのに、解決したかのようにかりそめの安堵感に小さく満足する。

「こんなことでいいのかな——」

電話を切ったあとに誰へ向けてでもなくつぶやくと、云い終わらぬうちに、次の相談者の声が耳に飛び込んできた。